

## 《研究ノート》

## エドワード・ハーバート『自叙伝』（翻訳） —— (6)「ルイ十三世時代における駐仏英国大使の 外交交渉と自著出版」——

山根正弘 訳

[訳者による前口上] 十七世紀イギリスの外交官にして詩人および哲学者・歴史家エドワード・ハーバート(一五八三—一六四八)による自伝の続き。この第六回で、本人による半生の回顧が終わる。以下にこれまでの訳者による小見出しを挙げる。

- (1)「先祖と親兄弟の肖像そして誕生譚」
- (2)「幼年期から思春期、そして通常教育に関する所見(前編)」
- (3)「通常教育に関する所見(後編)、そして遍歴の騎士時代」
- (4)「大陸での武者修行、そして嫉妬に狂う貴顕紳士による襲撃事件」
- (5)「ヨーロッパにおける職業軍人の経歴とフランス大使就任」

訳文中、諸々の括弧の使い方は、従前どおり。

スペイン語は下線(アンダーライン)で示した。

なお、訳者が施した注の番号については、前号より続く連番である。

冬の到来とともにパリの役邸に戻り、両国間の同盟条約に着手した。先に述べたように、そのために特命を〔内々に〕帯びていたのであった。けれど、フランス王〔ルイ十三世〕は長々と先に延ばした。その間に、オランダ総督マウリッツ〔オレンジ公〕の〔異母〕弟君フレデリック・ヘンドリック〔孫は後の英国王ウィリアム三世〕がパリを訪れ再会した。低地帯の兄君に劣らず義理があり、大歓迎した。パリで弟君と連れのを者百皿分の料理で歓待した。百ポンドの出費と記憶している。

フランス王はようやくある日、両国間の盟約のため式典を執り行なうことに決めた。それで、私と供回りの者は贅沢な衣裳に身を包んだ。あれやこれやで千ポンドかかったと記憶している。実に盛大な式典で、それを題材にしてフランス語で小さな書物が大急ぎで印刷されたほどである。調印が終わった後は、在仏英国大使の肩書でパリに滞在した。

さて、ここで私自身に関する個人的な出来事に触れて置きたい。同盟交渉全体の枠組みや周囲の状況に深入りせず、先述したとおり、それらは外交論のため取っておく。時間の多くは、フランスの王侯貴族や国務会議諸卿の訪問に充てた。私の訪問は

常に決まった時刻に為され、接受せられた。各国のフランス大使のお歴々も同様の対応をしてくれた。なかでもヴェネツィアと低地帯とサヴォイアの大使たち、そしてドイツの諸侯と大使たちは私に敬意を払い、通常は役邸に会いに来てくれた。当時の緊迫した国際情勢について協議したものだ。というのも、スペイン大使が権勢を揮い、世界に君臨する覇者を気取っており、前述の大使全員が一致団結してスペイン大使に対抗しようとした。我らすべての努力奮闘も虚しく奴の行動を阻止できず、奴は公的には国外での試みを首尾よく済ませ、私的にはフランスの主要閣僚を何人も買収した。このことは多くの経路で判ったが、なかんずくあるイタリア人の仲介によって明確になった。というのも、そのイタリア人はスペイン大使がフランスでの任務用に得たお金を、為替手形にして再配分していたからだ。つまり、そのイタリア人がスペイン大使用の尋常ならざる莫大な額のお金を受け取る手はずになったとき、諸般の雲行きがにわかになぜ怪しくなり、私および先述の各国大使の説く道理が如何に妥当なものであったにせよ、功を奏することがなかった。だが、のちに不当な状況を元に戻そうと皆で一丸となり策を講じたが、それもスペイン大使の手許に新たに莫大な資金が到着するまでの話で、先の閣僚ら〔同じ穴の貉〕に裏金が行き渡ると、<sup>はなぐすり</sup>鼻薬を嗅がされたが如くもとの木阿弥となった。それでも、スペイン大使と私の間では、何度も行き来が繰り返された。ある訪問の折、スペイン大使が言うには、我らの利害は様々であるが、ふたりの間でなら親好を続けられるであろうと。というのも、それぞれが自分の仕える国王に最善を尽くしても、ふたりの間で軋轢が生じることはないというのである。彼奴の説く道理が気に食わぬわけではなかったものの、一言どうしても言い返せたらと思った。イギリス国王の名誉を守るため捨て身の覚悟だと。私のこの発言には理由がある。つまり、フランス国王アンリ四世の御代、スペイン大使はイギリス大使の代理を務めていたという経緯がある。ある時、二国の大使が國務卿の控えの間に呼ばれたとき、スペイン大使は壁により掛かり尊大な態度でイギリス大使の手を取り、スペイン国王の正当な権利によりイギリス大使の地位を占めるものとする、と公然と言い放った。我が国の大使はその場で面子に関わる問題に不快感を示さず、スペイン大使は英国大使から暗黙の諒解を得たものと誤解し、さらに大きな顔をする機会を得たというのだ。このような経緯のため、スペイン大使がパリで潰したと思い込んでいるイギリスの面目を回復するため、私は心を砕いた。スペイン大使は我が役邸で、それぞれの君主に全身全霊を捧げよう、とスペイン語でよく話していた。それで、私はイギリス国王陛下の名誉を挽回する機会を窺った。たまたまある日、ふたりとも様々な案件でフランス国王のもとに参集することになった。途中、パリとエタンブ<sup>(59)</sup>の間で、スペイン大使が私の前方に位置し、馬車に乗り、十六から十八名の騎馬兵を連れていた。私はというと、十から十二名を連れてやはり馬車に乗っていた。足並みの遅いスペインの歩調に従うか、あるいは急いで追い越すか選択を迫られた。そうしな

ければ、前任者のイギリス大使と同様に侮辱を甘受し、面目丸つぶれになる<sup>おそ</sup>恐れがあった。そこで供回りの者たちに、置かれた状況全体と、何らかの方法で我が国王陛下の名誉を取り戻したい旨を説いた。さらに、部下の者に助太刀してくれるかと尋ねた。一同の者が誓ってくれ、御者に歩法を速めるように命じた。スペイン大使は私が近づくのを見て、私の意図を勝手に邪推し、使者を遣わしご挨拶をと申し出た。応諾すると、使者は大使のもとに帰った。大使は馬車から降り、公道の真ん中で私を待った。その姿が見て取れたので、私も馬車から降り、仰々しいお世辞たっぷりの挨拶を返した。大使は別れを告げ、近くの空堀に赴き、おもむろに放尿の仕草をした。しかし、実際には、私が馬車で通り過ぎる際、大使の方が優位にあることを誇示する狙いであった。その悪意が私にも透けて見え、馬車を降りて予備の馬に飛び乗り、かの空堀まで急いだ。何故そこに立っているのか、そのわけは十分承知していると大声で怒鳴り、すぐに馬車に戻るようにと命じた。でなければ、私とその穢れた道を通り、同じ轍を踏むことになっていた。大使は私の気象をよく知っており、不平たらたら馬車に戻った。大使も供回りも当惑した様子でお互いに顔を見合わせるのが関の山だった。この間に私の馬車は、前方にいた大使の馬車を追い抜き、その直後、私は予備の馬を降り馬車に乗り込んだ。その時たまたま、私の馬車馬の一端が蹄鉄を失い、四百メートルほど手前の鍛冶屋に引き返すことになった。蹄鉄をすぐ打てそうもなく、したがって鍛冶屋の手すきを待っていた。スペイン大使は我らに追いつき、さらに追いつくこともできたはずなのに、さらなる侮辱をおそれてか、かなり驚嘆すべきことだが、装蹄が済むまで公道で待っていた。両者ともにエタンプまで旅を続け、スペイン大使はかなりの距離を置き我らの後塵を拝した。

スペイン人があまり面子の問題に拘泥しなければ、この一件に触れることもなかった。これを裏書きするのに、スペイン大使がスペイン国王フェリペ二世〔英国女王メアリー一世と婚姻関係中、英国の王位を兼任した〕に為した返答を思い起こすのがよからうと思う。国王フェリペは、大使がイタリアでの重要案件を放置したため、奴を咎められた。それというのも、大使はこのような名誉や体裁に関わる問題でフランス大使と意見の一致を見ることが出来ず、その案件を怠ったのだ。国王フェリペのたまたま、儀礼のため重要な案件をお座なりにするとは如何にと。大使は恐れ多くも陛下に盾突き、何と、儀礼のためですと。陛下自身が儀礼に過ぎぬではありませぬか、と<sup>ようかい</sup>容喙した<sup>(60)</sup>。しかしながら、スペイン大使は私に上手を取られたことを公然と無視したが、聞くところによると、あの出来事に一矢報いるまで猫を被っていたという。だが、今日に至るまで、エタンプの敵を<sup>かたき</sup>バリで討たれたことはない。

フランスの大公爵を何度か表敬訪問したが、その貴顕紳士の中に、かの大元帥レスディギエール公爵〔フランソワ・ド・ボンヌ〕がいる。老いさらばえて耳が不自由であった。ご隠居が発した最初の言葉は、耳が遠いものだから、大声で話してくれるか

であった。生まれながらにして命令するだけで、聴従の必要がないからでしょう。周りの者が閣下の言を聴く耳があれば十分ですと答えた。老公爵はこのお世辞を飲み干してくれた。老翁が記した軍に関する金言と所見の手稿を持っているが、私の値踏みでは高価な代物だ。

ここで個人的な話をしよう。眉唾に思えるかも知れないが、天地神明にかけて真実である。フランスに来て一年半が過ぎた頃、バーゼル [スイス] の仕立屋アンドルー・ヘンリー (今はブラックフライアーズに住んでいる) から、背広を一着誂えるのに、サテンの生地を以前の分に加えて半ヤード上乘せして欲しいと要望があった。フランスに来てから太ったわけでもあるまいと言って、その理由を訊いた。仰せの通りで横に広がったわけではないのですが、縦に伸びましたからという。私が信用しないと見ると、従前の型紙を取り出し当ててみると、なるほど現在の丈まで達しないという寸法だった。何故このようなことになったのか見当がつかなかった。けれど、臍に落ちぬまま、半ヤード分を余計に与えた。本国に帰ってから、疑念を晴らそうと思った。というのも、フランスに向けて出発するほんの少しまえ、ベドフォード伯夫人 [ルーシー] に請われて [第三代] ペンブルック伯ウィリアム・ハーバートと丈比べをしたことがあるからだ。その際、伯爵の方が小指の幅ほど背が高かった。イギリスに帰ってから計り直してみると、ふたりとも驚いたことに、今度は小指の幅ほど私の背丈が高くなっていて、身長の変化は、なかんづく前述の四日毎に起こる瘡おこりのせいだと思う。瘡が収まってからはかつてないほどの健康に恵まれ、お蔭でのちに悔いることになる愚かな行為に走るようになった。実は今でも後悔している。だが、細君が渡航を拒み欲望には際限がない、したがって犯した過ちはその分を差し引いて斟酌してもらえると有り難い。しかしながら、請け合ってもよいが、フランスであろうとイギリスであろうと遊郭には一步たりとも足を踏み入れたこともなく、過度に快樂を貪ったこともなく、ましてや女漁りを常習とする奴らの共通点、愛を装い籠絡する偽善を為したこともない。この一件から帰結を導き出すと、あまり気乗りがしないものの、神にかけて告白すると、姦淫やそれに類する罪に悅樂を感じたことはなく、この手のことに時に耽ったとしても、それはさらなる大罪を避けるためであったと。|自然に反するものはことごとく忌み嫌ってきた| 確かに合法的な特効薬があれば、度を越す行為に耽ることは一切なかったであろう。思うに、人類の中で最も貞操觀念の高い者の魂を揺さぶったと思しき状況を語ることによって、自身の罪状を酌量して頂けるであろう。だが、事情を明かすのに相応しくない色恋沙汰は、語るのを差し控えよう。なぜかという、無理やり手込めにし、手傷を負わせたわけではない場合、哲学者はこの行為を「操正しい行為のひとつ」に数え上げてきたが、それとともに「恥ずべき言ひ訳」のひとつと見なしているから。したがって、自分の身に関する奇妙な事柄だけを語ろう。

私よりも頭ひとつ分だけ背が低く、しかも瘦身の男とよく体重を較べたが、私の方が軽かった。実際に一緒に目方を量ったことのあるサー・ジョン・ダンヴァーズ〔継父；実母マグダレンの再婚相手〕と存命のリチャード・グリフィス〔召使い〕が証人である。また頭頂には、かつて肉刺<sup>まめ</sup>があったし、今現在もある<sup>(61)</sup>。私に仕える侍従にはよく知られた事実だが、直接触れる肌着や下着の類は、他の人には見受けられることはなく、また容易には信じがたいほど、馥郁たる香りがする<sup>(62)</sup>。やはり吐く息も、同様に芳しい。しかしそれはタバコを吸うようになるまでのことで、晩年になり鼻水や鼻汁に悩まされ、処置を余儀なくされた。〔喫煙は、当時の流行で誘淫のほか健康増進に吸っていた〕けれど、そう長くは不快な口臭が続くことはなかった。涙がよく垂れ、風邪には人一倍かかりやすい体質だと思うが、〔傷寒<sup>はな</sup>で〕熱にうなされることは生涯でも稀であった。我が子孫に、身内だからこそ、すべてを伝えておこう。でなければ、ほとんど書く価値もなからう。

私がイギリス国王よりフランスに派遣された趣意は、両国の友好関係を維持することであり、任務は高貴で喜ばしいものだったが、大した労苦もなかった。というのも、フランスは当時イギリスに対して奸計を弄することもなく、ジェームズ王は全世界が認める平和愛好者であったから。このような次第で、条約の調印や交渉に時間を費やす傍ら、フランスの閣僚やパリ駐在の各国の大使との付き合いに時間を割いた。余暇は自著『『真理について』』の執筆だけではなく、様々な貴顕紳士を訪問するのに充てた。それは単に、その国の世情を知り、社交礼儀を弁えるためであった。自由で偏見がなく、愛想よく付き合うことが大いに求められた。上流階級のあらゆる人々が互いにもてなすことに夢中で、天気の良いとき、パリではチュイルリーの庭やヴァンセンヌの森で、男女を問わず社交が首尾よく行なわれる。美貌の持ち主か、あるいは立派な身なりや流行の服を着た者たちが、そのような社交の場に出向き、人々に気さくに話しかけないとすれば、その行為は礼儀作法に反すると考えているらしい。天気が悪い時の過ごし方は、互いの屋敷を訪問し、懇話な挨拶を交わし、音楽を聴き、あるいは舞踏に打ち興じるのが常である。かなり馴れ馴れしい態度だが、その国の流儀に倣い慎みを以て行なわれ、人倫に悖<sup>もと</sup>ることはない。その流儀とは、チュイルリー庭園であれほかの場所であれ、男性がある貴婦人と談笑しているとき、身分のある他の男性がその貴婦人のところに近づいて来るのを認めると、その貴婦人のもとを去り他の貴婦人のもとへ行く。男性たちは花から花へと飛び回り、お互いに邪魔し合うこともなく、会話が自由に同等に行なえるようにするというものである。これらの条件の下では、何ら例外もなく諍いも起こらない。

たまたまある日、夏の午後八時頃のこと。当地で得た情報を我が国の陛下に知らせる急書を認めようと、チュイルリー宮殿から帰ろうとしていた。その折、王妃殿下〔アンヌ・ドートリッシュ〕が庭園に入ってこられた。取り巻きの貴婦人を何人か連

れられてはいたが、廷臣はだれひとりとして従えていなかった。私は小径の一方の側で歩みを止め、妃殿下と供回りの者に敬意を表したあと、屋敷に急いで帰ろうとした。そのとき、妃殿下が私に目を留め、しばし佇まれた。私にエスコートを期待されているかのようだった。だが、私がある場で表わせる情意は妃殿下という立場や地位に抱く敬意がせいぜいであった。隣にいたコンティ親王妃〔前出；英国王妃アンにスカーフ贈呈を託す〕が私を呼び止め、お妃様と散策しなければなりませんと言う。しかし、我が国の陛下に送る急書に着手しなければなりませんからと言いつくと、ヴァンタドゥール公爵夫人〔既出；モンモランシー老侯爵の二女〕がコンティ親王妃のあとから来て言うには、やはり拒むことは出来ませんと。それで、フランスの流儀に従い公爵夫人の手を引いた。すると、コンティ親王妃が当人ではなく別の人に授けた小生の礼儀作法が気に喰わぬと言って、公爵夫人に同意を求めた上で、私のもとを立ち去った。だが、妃殿下がその場を離れなかったため、親王妃をそのまま見送り、精一杯恭しく妃殿下のもとに寄り彼女の手を引いた。このようにして、オレンジの木が何本か育つ庭園を散策し、楽しく談笑していると、帽子を被らずにいた我らふたりの頭上に小さな粒が降ってきた<sup>(63)</sup>。ことの次第はこうだ。国王陛下〔ルイ十三世〕が庭にいて、空の鳥を狙い銃弾を放った。狙いの定め方が完璧だったのか、見事その弾粒が我らの頭に当たった。王妃はびっくり仰天、私がさらに近寄りお怪我はありませんかと声をかけると、ええ、大丈夫ですとの答えであった。それで、髪から弾を二、三粒取って差し上げた。庭師を呼んで、陛下に伝えさせた、妃殿下がこの庭におられるので撃つのを控えて下さるようにと。そのことが国王に仕える貴族たちの耳に入るとすぐ、多くの者が王妃のもとに駆けつけた。その中に、ル・グラン殿〔ベルガルデ公爵；ロジャー・ド・サン・ラリー・ド・テルメ〕がいた。彼奴は王妃がいまだに私と談笑しているのを見つけ、秘かに妃殿下の背後に忍び寄り、ポケットに隠し持っていた砂糖菓子コンペイトウをそっと妃殿下の頭に降り注いだ。妃殿下に再び弾粒が降ってきたと思ひ込ませるのに十分な小細工であった。ル・グラン殿に向き直り、貴婦人を怖がらせるより他に余興の策が思い浮かばないとは、老いたる廷臣の名折れけなと貶してやった。しかし、妃殿下はすぐさま寝所に戻るといっているので、暇乞いをして私も役邸に帰った。上記の事件はたとえようもなく奇妙で、ここに書き留めておくのがよいと思う。

ある日たまたまコンデ公が屋敷に訪ねてこられ、イギリス国王陛下のことが話題となった。公が言うには、陛下におかれましては学問上の知識と高い見識を有され、また温厚のうえ徳高くあらせられることは存じておりますが、呪詛に凝っておられるそうですね。それは陛下の惻隱の情の顕れですとお答えすると、呪詛が情けや思いやりとは如何と詰問された。げに、ありなん。といいますのも、陛下は罪人をご自身で罰することもできますが、処罰を神の御手に委ねられます、と再度お答えした。このように陛下を弁護して、後にフランスの宮廷で誉めそやされた。

リュイヌ殿は依然として王の寵臣にして、フランス国内の改革派教会の信徒〔カルヴァン派プロテスタント／ユグノー〕に対して干戈を交えるように勧め、次のように進言した。陛下、かのように権勢を誇る勢力を王国内に留どまらせては、偉大な君主と呼ばれることはありません。また異端者をあまたの数にまで膨れ上がらせ、公の布告によって任用される官職に就かせては、キリスト教国の正当な大王と称されることもありません。したがって、スペインの歴史を繙けば明らかなように、彼らがムーア人〔モーロ人〕を排斥して異国に放逐したが如く、我らも国内の改革派教会を殲滅すべきであります。この進言は若き王には是認されたものの、賢明なる重臣には不評であった。特に大法官シルリー侯爵〔ニコラ・ブリュール〕や大蔵卿〔ピエール・〕ジャンは異議を唱えた。ジャンの考えでは、一方の宗教を根絶する目的で内乱を起こすより、ふたつの宗教を認め、平和を望むという。しかしながら、フランス国内のイエズス会派だけではなく幾人かの諸侯や軍人に、リュイヌの目論見は称賛された。ある日、〔第四代〕ギーズ公〔初代シャルル〕が私のもとを訪れて言うには、改革派を根絶やしにするまでフランスに安寧はないという<sup>(64)</sup>。公爵の真意が解せませぬと言うと、理由を尋ねられた。改革派の鎮圧が済むと、次は国内の地方総督や要人の番です。また、現国王は名君であられますが、継承者がそうとは限りません。さらに、君主という者は、目の上の瘤<sup>こぶ</sup>がなくなれば、とかく暴君に豹変するものですから、とお答えした。私の返答は不吉な預言となった。なぜかという、改革派が現在のように骨抜きにされた途端、幾人も地方総督、なかでも当のギーズ公の権力や権限が弱められ抑制されたからだ。公爵は、さぞ臍<sup>はら</sup>を噛む思いだろう。そうはいつでも内戦は激しさの度を増していった。イギリス国王陛下より賜ったご教示に従い諫言をしたにもかかわらず、どちらの側にも思い止まらせることが出来なかった。次のような言い分をよく耳にした。フランス人の見るところ、我々イギリス人は、教会に相應しい荘厳な儀式とともにその位階制度を温存し、そして聖人を讃える祝祭日や教会音楽を堅持し、神を讃美し神学に名誉と褒賞とを授けるなど神の様々な教えを遵守しており、そのためイギリスの宗教改革は許容されるものであるが、その一方でフランスの宗教改革はイギリスの改革とは違い、早計で過激な改革であり、自国民にとうてい容認されるものではないという。これらの見解に対して、次のように答えた。フランスがローマ・カトリック教会から離別する理由は、温厚で穏当な人々により様々な教授も開陳もされています。それによると、改革の多くは民衆が口火を切ったといえます。しかるにイギリスでは、宗教改革は君主自らが着手し、したがって過激になることはありませんでした。そういう次第で臣民の反感を買うことがなかったのだと思います。さらに見解を補足して具申した。もしフランスのプロテスタントも教会の位階制度を支えられるだけの資金が潤沢にあれば、その制度を容易に認めるでしょうし、またフランスの教会堂がローマの教会堂に劣らず美しいものであれば、そのため

に分裂をするというよりむしろオルガンと聖歌隊を好むとともに、古式ゆかしい荘厳な儀式を採用するでありましょう。祝祭日についても、フランスの要人や司祭の方々は、平民と較べると、さらにそれらを容認することは間違いありません。民衆の多くは労働者や職人で、生計を立てるにはローマ・カトリックよりプロテスタントの方が、さらに多くの日々を労働に費やすことができ、都合がよいでしょう。しかしながら、新教徒の存在はカトリックの司祭に生活や行動を改善させるほどではなくても、用心させるぐらいには戒めとなっています。さらに明白なことに、改革は新教徒の間から始まりましたが、旧教徒も様々に自分たちの制度を改め、平信徒から奪い取った権力を弱めるだけでなく、以前よりも信仰を深め節制に勤めています。最後に、新教徒は国家の統治に関して王の権威だけを認めています。一方で旧教徒は王権を教皇権よりも様々な点で劣り、隷属すると考えています。このように情理を尽くして答申をしたが、リュイヌ殿とフランス王の決戦の意向を翻すには至らなかった。

〔一六二一年六月〕フランス王は今や軍の召集を済ませ、国内の改革派絶滅へ進軍を始めた。イギリス国王より、和平を取り持つようにと勅命が届いた。もし私による説得が首尾よく功を奏さなかった場合、我が国王陛下は両陣営に対し言葉を尽くし新教徒の身の安全を願うとともに、仏王には新教徒の殲滅や根絶を許さない旨を知らせるよにとの命であった。仏王はサン＝ジャン＝ダンジェリ〔フランス南西部、ユグノーの軍事拠点〕を包囲するところであったが、そのとき私はと言うと、パリにいて熱病から治ったばかりであった。病床に臥している間、有能な医者<sup>の</sup>助けのほか、フランスの貴顕紳士淑女の方々から見舞いを受け慰安を得た。なかでもコンティ親王妃は二、三時間も傍らに坐り、愉快的話を<sup>して</sup>励ましてくれた。私は感謝の言葉のほか何も返すことができず、気が滅入った。それでも英国王より賜った勅命で元気を取り戻し、遅ればせながら馬車に乗り込み供回りの者を連れ、サン＝ジャン＝ダンジェリへ向かった。当地からほど遠からぬところに着くと、様々な状況からイギリス本国の指令の趣旨がすでにフランス側に露見し、歓迎されないことが解った。それでも仏王に拝謁し、職責から言うべき事をハッキリと伝えた。ご返答は賜ることはなく、ただリュイヌ公に会うよにとの仰せ<sup>で</sup>であった。走狗<sup>の</sup>リュイヌに会えば、御意が判るとい<sup>う</sup>のだ。こうしてリュイヌのところに行ってみると、見かけは歓迎の意を表してくれた。だが、内心では如何なる奸計を弄して私を陥れ、改革派に対する加勢<sup>を</sup>頓挫させるつもりか解らなかつた。というのも、アルノー氏という問者<sup>を</sup>を室内の帷<sup>の</sup>陰に潜ませていたのだ。この御仁はその当時は改革派であったが、すでに王の側に寝返る密約を交わしていた。後にカーライル伯〔ドンカスター子爵；ジェイムズ・ヘイ〕に自白したところによると、リュイヌが私に為す返答を改革派らに伝える際、私からはほとんど如何なる掩護射撃をも期待できないと、役目として伝えなくてはならなかつたという。このような次第で、リュイヌを前にして椅子に坐ると、用向きを尋ねられた



ので、次のように答えた。我が国の国王陛下の仰せでは、仏王と国内の改革派との間に平和を取り持つようにとの命です。さらにフランスの体面を保ちながらも両国の友好関係を損なわないように、公平で対等な関係でそれを成し遂げられたいご意向であると。これに対するリュイヌの返答は、なんとぞんざいなことか。英国王はフランス国内の軍事行動に何の関係がある。内政に干渉するのかと<sup>(65)</sup>。英国王はことを為すに当たり、その理由を開陳する必要はありません。小生としても陛下の命に服すれば十分でありますと応酬した。とはいえ、もしリュイヌが丁寧な言葉で訊いてきたら、合点がいくまで全力で説明したであろう。これに対しリュイヌは、ただ、あ、そうと、けんもほろろ。勅命を全うすべくリュイヌに伝えた。英国王は仏王アンリ四世との間で交わされた取り決めにより、どちらか一方の君主が先に天に召された場合、遺された者が相手国の秩序安定と静穏無事に尽力する旨、すでに伝達されています。また、最近のフランスの内乱においても、これまでに義理堅くもこの御意を表明されているばかりではなく、この期に及びフランスのために如何に深く心を痛めているかをお示しあそばされています。さらに、フランスに平和が確立された暁には、昔ながらの友好国であり同盟国であるプファルツ侯国〔ジェームズ一世の娘エリザベスの嫁ぎ先〕を援護していただけることを願っておられますと。貴殿から進言は一切無用と言うので、英国王の愛情と善意とを十分にご理解していただけて誠に遺憾ではありますが、そのお言葉をご回答とする旨、またこちらの条件が退けられましたので、当方が為すべきことはよく存じておりますと、役儀上意見した。これにはさすがにリュイヌも癩癩を起したと見えて、英国など恐れるに足らぬはと口走った。それを受けて、もし汝ら英国国民など虫唾が走るはと言ってくれていればその言葉を信じたでしょうが、その答弁は筋違いですねと。その間、リュイヌにすでに伝えた言葉、つまり為すべきことは解っている〔軍事介入の示唆〕、その台詞の他に繰り返す言葉がなかった。この挑発は、与えられた権限の域内では、いくらか取るに足らぬ些細なことであったが、リュイヌは鬼の形相で、神にかけて、もし大使でなければ、痛い目に遭わせてやるのだが、と怒鳴った。小生は、大使であるのと同様、名のある騎士であると宣言し、おっつけ劍の柄に手をかけ、目にもの見せてくれるわ〔ぞんざいな物言いの報いを受けよ〕と、椅子から立ち上がった。リュイヌも同じように席を蹴ったかに見えたが、出口まで案内しましょうと柳に風と受け流した。肩透かしを喰らい、このように鼻であしらわれた後では、外交礼儀にこだわる理由はありませんと突っぱね、腰抜けのもとを去った。宿屋に戻ってからは、三、四日の間、サン＝ジャン＝ダンジェリの町に近接路を造る際、フランス軍がどのようなやり方をするのか、お手並みを拝見して時を過ごした。当時のことでよく憶えているのは、大砲の届く範囲に馬車を走らせると、町の者が私を敵だと思ひ込み砲弾を雨あられと浴びせかけたことである。御者は背筋が凍りつき、一步も先に駒を進められなかった。馬車から降り、御者に馬を安

全なところまで曳くように命じた。さらに多くの砲弾を浴びたが、塹壕まで歩いて行った。スコットランド人のシートンの案内で塹壕内を見学した。低地帯軍の掘り方とは少し違いがあるのに気付いた。かように得心したが、サン＝ジャン＝ダンジェリの町も降伏間近で、コニャックにいる仏王に暇乞いをするのによい潮時だと思った。コニャックからほど遠からぬ村に、夜の十時頃に着くと、軍がすべての宿泊所を占拠していた。それで、市が開かれる広場で馬車を降り、<sup>りょうまつ</sup>糧秣の調達に宿屋へ行かせた。持ち帰ったのは、ライ麦パンが六斤だけだった。私自身と連れで食べるか、あるいは馬に与えたものかと迷っていると、私の所在を聞きつけた改革派教会のフランス貴族ド・ポン殿が立派な供回りを連れて現れ、近くの城で泊まるようにと勧めてくれた。誠に有り難い申し出ではありますが、あなた様の身を危険に晒すことになり、どうしても受けられません。当地での用向きは新教徒に味方することであり、フランスの主要閣僚たちは私と気脈を通じる者を警戒するでしょうから。とはいえ、もし町中で宿泊できる場所を提供して頂ければ、慎んでお受け致します。遣いの者を方々に出し、ようやく借地人の家に部屋を見つけてくれた。ポン殿自ら案内してくれるとともに、私と馬が泊まるのに必要なものを揃えてくれたものの、ポン殿の敵、王党派の兵士が占拠した場所であったため、その場を離れるようお願いした。ことのすべては隠密裡に行なわれたわけではなく、ポン殿はのちに私と内通した<sup>かど</sup>廉でフランスの法廷に告発された。その嫌疑を晴らすのが私の定めであった。

翌日、コニャックに行くと、貴族で友人のサン＝ジュラン陸軍元帥〔パリス伯爵；ジャン・フランソワ・ド・ラ・ギシュ〕が出迎えてくれた。元帥閣下が言うには、小生は王の寵臣リュイヌ公の逆鱗に触れ、進退これ<sup>きわ</sup>谷まるという。それとともに、私が為すべきことについて助言を賜った。でも、剣が手許にあれば、どこであろうと身の安全は確保できます。また、仏王陛下に謁見を願い出る所存ですと答えた。お目通りが許され、意外にもそれほど冷たくあしらわれることはなかった。陛下とは見かけは良好な関係のまま別れた。

その後すぐ当地からパリに戻ると、リュイヌ公の権勢を妬み傲慢さを嫌悪するすべての閣僚や貴族から歓迎された。一同の話では、リュイヌは彼奴の弟〔カドネ侯爵；オノレ・ダルベール〕を筆頭に使節団を組みイギリスに派遣したという<sup>(66)</sup>。その目的は、第一義的には私に対する苦情を申し立て、できれば罷免を求めることであった。つまり、サン＝ジャン＝ダンジェリで不届きがあったと思ってもよらぬ仕方で濡れ衣を着せ、さらには事の発端が私にありと讒訴することであった。これらの情報提供に謝意を表すとともに、リュイヌの讒言と<sup>つばぜ</sup>罅迫り合いの真相では小生にかなり分があり、剣で証明してみせると意気込みを語った。一同の者は憤慨するどころか、幸運を祈ると祝福してくれた。

その直後、続いて外交使節〔デュムラン殿〕が大勢の供回りを連れ、仰々しくイギ

リスを訪れた。[一六二一年の夏] 私に対して告発が為され、本国に呼び戻され[解任され]た。それも悪くなかった。というのも、支出状況は非常に悪く借金が嵩み、現在弁済できる以上の額、三千か四千ポンドを商人から用立ててもらっていたから。このような次第で宮廷に参内すると、当時はまだ友人であったバッキンガム公爵がフランス大使[ロンドン駐在の第二代ティリエール伯タンギー・ル・ヴェルネ]により為された異議申し立てを事細かに話してくれた。[一六二一年九月二八日]先に披露した抗弁に付け加えて、私の言い分を剣で証明致しますと決意を述べた。直後、陛下とバッキンガム公爵を前にして、ふたりの間で生じた行き違いの件で決闘を申し込むため、リュイヌにラッパ手を遣わすのを慎んでお願いする旨を伝えた。しかし、私の挑戦は詮議されることなく、却下された。しかしながら、私の要望は広く世間の知るところとなり、話題となる機会も多かった。私の話を聞いたすべての人は、好意を寄せてくれた。だが、唐突にリュイヌの訃報が舞い込み、あっけなく一件落着した。[ユグノー征伐の只中、一六二一年十二月二一日、猩紅熱で歿]私を元の任務に復帰させ、フランスに戻してくれるよう要求した。けれど、すぐには出発しなかった。大蔵省からの支給も見込めず、また私自身の収入でフランスでの債権を償うのも難儀であった。この間にカーライル伯[前出]がフランス特命大使の任を受け、リュイヌ公とのやり取りの確証を持ち帰った。帷の陰に身を潜めていた先述の曲者、アルノー氏が私の言ったことはすべて本当であると証言した。陛下も納得された。

この時までには借金の返済を終え、陛下に新しい勅命を仰ぐと、カーライル伯が次の通達を携えてきた。陛下は私の能力と忠誠心とを試された上で、すべてを私の分別に委ねる以外如何なる指示をも与えないとのことであった。それというのも、私が用意周到に物事を運び、同様に火急の事態に直面した時も、本国から指示を仰ぐ必要がなく、目下何を為すべきかを見極められると考えたからであるという。つまり、上から指示を待てばフランスやドイツそしてキリスト教界のほかの諸地域でも沸き返る危機的状况に対応が遅れ、もしかしたら然るべき適切な判断が出来ないかも知れず、したがって私の警戒心や思慮分別それに忠誠心に委ねるべきであるという。この通達に対して閣下に次のようにお答えした。これは陛下が私にお寄せくださる特別な信頼の証であると思います。とはいえ、口幅ったいようですが敢えて申し上げます。これによって権限は増すものの、過誤を犯す幅が広がります。宗教戦争が盛んなこのような激動の時代にあって、敢えて小生の判断力に頼り、僭越にもあらゆる出来事に対処しようとは思いません。したがいまして、畏れながら今一度、新たな指示を与えて下さらんことをお願い申し上げます。必ずやお役に立つこととお約束致しますと。これを以てカーライル伯は国王のもとに帰ったが、先述した通達のほかは何も音沙汰がなかった。つまり、陛下は私を全面的に信頼され、指示を与えて行動を制限せず、すべてを私の分別に委ね、それとともに望まぬ悪しき事態が生じたなら、その失策は私の職

務怠慢で、責任を転嫁できると見込んだのである。

陛下がこのように肚を決められたので、慎んで陛下と宮廷の友に別れを告げた。サヴァージュ氏のもとに行き信用状を所望すると、以前と同じように金額の欄が空白のものは、ご用立てはできかねます。ご入り用の金額のみにして下さい、という。たしか、耳を揃えて返したはずだがと詰め寄ると、取り決めの期日までに完済されませんでした。ですが、三千ポンドの信用状をお作りしましょう。あなた様がお望みになれば、さらに多く借りられることを請け合います、という。サヴァージュ氏の保証は確かだった。のちに私の信用で、さらに多く総額で五、六千ポンドも借りた。

〔一六二二年二月二二日〕パリに着くと、<sup>そうそう</sup>錚錚たる方々から歓迎された。リュイヌ公との確執で気を悪くしている人や、公の頓死を悼む人がひとりもないことも解った。なかでも、仏王妃はリュイヌ公を長らく嫌悪していた者として最たるものであった。これに付随して、王妃殿下のお言葉が思い起こされる。ある日、妃殿下に拝謁した折、リュイヌとの仲を取り持つのに如何ほどご尽力して頂けましたか、と尋ねた。正当な理由であれ外圧であれ、リュイヌ公を憎むのに如何なる大義名分があったとしても、リュイヌの味方をせざるを得ませんでした、とのご返答であった。スペイン語で、お妃様らに無理強いできませんねと言うと、ニッコリと微笑まれた。

イギリス国王陛下より賜った自由、つまり私自身の分別以外の如何なる規則にも拘束されない裁量に従い、公務の処理に着手した。その間の交渉はかなり順調で、駐仏の残りの日々は、ことの処理に関して陛下に満足して頂けた。つまり、フランスやドイツそしてキリスト教界の他の諸地域で沸き立つ危機的な状況に際して、陛下の名誉を保ち利権を死守したと理解して頂いた。この任務はとても重要であったが、私には朝飯前であった。というのも、世界各地に散らばるイギリスの大使や外交官から、各々の管轄で起こる出来事が寸分違わず報告されたからである。ヴェネツィア大使で学識があり知略に富むサー・ヘンリー・ウォットン、イタリアで何か新しい出来事があるとすべて知らせてくれた。サー・アイザック・ウェイク〔一時期ダッドリー・カールトンの書記を務めていた〕からは、サヴォイア、ヴァルテリン〔イタリア最北の地、スイスに境を接する〕、そしてスイスの情勢が詳細に知らされた。ドイツの外交官サー・フランシス・ネザーソールからは、陛下の娘婿でボヘミア王プファルツ選帝侯のために、ドイツ君主同盟の動向が逐一、それとともにドイツの情勢も遺漏なく報告された<sup>(67)</sup>。低地帯の大使サー・ダッドリー・カールトンからはオランダの情勢を、ブリュッセルの外交官ウィリアム・トランブル氏からは南ネーデルラント関連の情報を、そして最後にスペイン大使サー・ウォルター・アストンや後任のプリストル伯〔ジョン・ディグビー〕、そしてコッティントン卿〔マドリード駐在の外交官〕からスペイン宮廷関連の情報を得た。これらの情報を分析し公務を処理するに当たり、問題の所在を見出し判断した。その他、パリで主に情報を得たのは、低地帯の大使ランゲ

ラク氏やドイツ君主同盟の外交官ポステック氏、それにヴェネツィア大使コンタリーニ氏、マンチュアの外交官で友人のグイスカルディ氏、ボヘミア王プファルツ選帝侯の外交官ゲレタン氏、スイスの外交官ヴィラーズ氏、ジュネーヴの外交官エノラン氏であり、これら様々な人々の助けを借り、寄せられた情報を合算して、為すべきことが判った。

ドイツで〔三十年〕戦争が激しさを増す中、フランスの数名の有志が私に面会を求めて言うには、ボヘミアの王妃殿下〔プファルツ選帝侯妃〕にご奉公のお口添え頂きたく存じますと。彼ら勇士は王妃のお役に立ちたいと切に願っていたのだ。私も同様に、その件で精一杯有効な手を打った。しかしながら、プラハ〔郊外の白山〕の戦い以降、〔敵対する神聖ローマ帝国〕皇帝側が完全に優勢を占め、これらフランス人は念願成就を見込めそうもなかった。この頃、〔ベルギーの名家〕クロイ公爵がブリュッセルからフランスの宮廷に転任され、私に会いに来られた。イギリスの島嶼のことなど眼中にないかの如く、世に普くすべての国がスペイン人に跪く時が来た、と大風呂敷を広げた。聞き捨てならぬ大言壮語に答えて言った。まだ実現していないことを神に感謝します。仮にそうなったとしても、最悪でもご貴殿の国が今置かれている危機的状況と変わりが無いという慰めがありますと。どのようにしてこの話が漏れ伝わったのか定かではないが、フランス人に大いに褒めそやされた。イギリス以外の国々は、〔このまま手をこまねいていると〕クロイ公爵やスペイン統治下の諸国が隷属するのと同じ厳しい支配を甘んじて受けることになる、という私の皮肉が読めたのであろう。

ある日、たまたまブリュッセルの外交官と低地帯の大使が矢継ぎ早に会いにやって来た。私は親しみを込めて、譬え話をした。〔南部〕十七州のうち、宗主国スペインの支配下にある地域の人民は、厩舎の馬のようだ。櫛で毛を梳かれ、毛並みを調べられ、秣を与えられる。同様に鞍を載せられ、拍車をかけられ、擦れて皮が剥ける。〔オレンジ公の影響下にある北部〕低地帯の人民は草原の馬に似ていると思う。厩舎の馬と同じように手厚く飼育されたいと願っているが、不羈奔放に飛び跳ね、蹴りを喰らわせ、暴れる。齒に衣着せぬ当てこすりだったが、ふたりの癩に障ることはなかった。あるいは、もし低地帯の大使が少し気を悪くしたとしても、後に機嫌が好くなったと思う。話を続ける中で、もうひとつ喩え話をしたから。ユトレヒト同盟諸州〔北部七州；ネーデルラント連邦共和国の礎〕は領内で猫の額ほどの居室に閉じ籠り海と陸の両方から兵糧攻めに遭いながらも、あらゆる機会に味方よりも敵が必要だと自ら勇猛心を誇示しているようなものだ。このお世辞を、きっと低地帯の大使は飲み干してくれたに相違ない。

この頃フランス人は、イギリス国王が皇太子〔チャールズ〕とスペイン王〔フェリペ四世〕の妹君〔マリア・アナ；ドイツ名アンナ〕との縁組を企てフランスとの同盟

を破棄するのではと、警戒していた。英仏二国間の友誼にのみ尽力していた私としては、為すべきことが多かった。[駐英スペイン大使] ゴンドマル伯爵 [ディエゴ・サルミエント・デ・アクニャ] はスペインからイギリスに渡り、そして午前十時頃、パリにいる私に会いに来た。軽く挨拶を済ませたあと、ゴンドマルが言うには、翌朝イギリスに向けて出立する予定で、都市を出るまで馬車で見送って欲しいという。それは出来ませんねと、気取らず陽気に断った。そのわけは、もし伯が強引に頼むとしたら、ローマ教皇の大使や皇帝の大使、それにババリア [バイエルン] 大公の外交官などゴンドマルに箔をつける馬車はたくさんあり馬車に事欠くはずがなく、私がスペイン側に靡いたかの如く、フランス人に疑念を抱かせるのが狙いと見え透いていたから。ゴンドマルはその時、喜色満面に私の顔を見て誘った。これから食事でもしないかと。こう申し上げると失礼ですが、今は出来ません。スペイン王のような立派な君主にお仕えする大使閣下をもてなすのに、普通のやり方では申し開きが立ちません。ぜひとも分相応の大饗宴にたく存じます。そう言って、暮らし振りを見て貰うため、伯の供回りの者を厨房に案内させた。調理場には、いつもどおりに、三本の焼串には肉が上から下まで突き刺さり、大小様々な深鍋には肉が茹でられ、窯ではたっぷりパイが焼かれ、調理台にはありとあらゆる種類の鳥肉がぎっしりと並べられ、平鍋にはフランス風にタルトが詰まっていた。この後、別室に案内し、十二か十六皿のスイーツを披露した。これらすべてが通常の分量である。スペイン人はゴンドマルのもとに戻り、如何に立派な献立であるかを報告した。とはいえ、私は再びゴンドマルに釈明した。大兄のような方には身分不相応ではないかと思えます。機会に恵まれましたら、さらに贅を尽くした酒席で歓待する所存ですと。私の口実に対し、ゴンドマルはすり寄り囁いた。そちを高く評価しています。ただ一杯食わせてやろうと思っただけです。そちはすでにお見通しのようなでしたね。イギリス人というのは、どうも懇懇に策略を回避するのが不得意なようですが。以後、お見知り置き下さい。イギリスでは精一杯務めて貴殿の職務をお助けいたしますと。ゴンドマルは有言実行の士であった。レノックス伯とペンブルック伯が証人である。さらにゴンドマルが言うには、小生は大使に適任であると。イギリス人は他の点では有能であるが、頼みを断ることに關しては下手である。だが、私は如才なく見事にやって退けたという。

ゴンドマル伯爵は海千山千の策士、それもイギリス国王を巧く説き伏せてスペインとの条約締結を進めさせたほどだ<sup>(68)</sup>。また、英皇太子にも、自ら縁談を成就させるためスペインに行く決意を固めさせた。その際、お忍びで旅立つか、あるいは公式訪問にするのか議論が重ねられた。結局、バッキンガム侯爵、侯爵の書記サー・フランシス・コッティントン、エンディミオン・ポーターそして侯爵付きの厩別当グライムズ氏を伴い、身をやつしてフランスからマドリードに向かうことになった。この五人は多少怖い思いをしてドーヴァーからブローニュ [=シュル=メール] へと渡り、早馬

でパリに着き、サン＝ジャック通りの旅籠に投宿した。宿に落ち着いてから、私に遣いを出したのか五人で相談したそうだ。話し合いの結果、否と決まった。そのわけは、あるひとりの人物の主張によると、私独りで私人の資格で来るなら、道中歩いて来なければならない、しかも私は面が割れており、誰かにあとを付けられ行き先が露呈し、私の到着とともに五人の顔ぶれも必然的に特定されてしまう、という。さらに、供回りを従え公務として来れば、私と落ち合う人物が皇太子とバッキンガム侯爵と知れ、その結果縁談が露見し、なりふり構わず隠密裡にことを運ぶ予定が、皇太子の身の安全さえ守れないおそれがあるという。しかしながら、皇太子は翌日フランスの宮廷やパリの都市を見物して回った。だれも皇太子の顔を知る者はいなかったが、ただひとりリネンの売り子だけは別で、かつてロンドンに行ったことがあり、彼が通り過ぎるのを見て、あれは確かイギリスの皇太子よと言ったが、道を遮ることもなく、敢えてあとを追うこともしなかった。さらに翌日、ご一行は早馬に乗り、スペインとの国境の町バイヨンヌまで旅を続けた。

第一報は、スコットランド人のアンドリュースと名乗る人物から舞い込んだ。その人物は、皇太子ご一行がスペインへ旅立つ前の晩、夜分遅くにやって来て詰め寄った、プリンスにお会いしたかと。どちらのプリンスのことでしょう、コンデ公はまだイタリアにおられるはずだが、と返答した。イギリスの皇太子のことですよと言うが、俄に信じられなかった。皇太子殿下がフランスにご来訪中と何度も誓うので、ようやくそうかと思うようになった。彼は皇太子に付き添う役目を仰せつかったという。その間、イギリス国王陛下のためにも、できる限り安全に通行ができるように、私に手配して頂きたいと訴えた。このため翌朝早く寢床を離れ、急いで首席国務卿のピュイジュー子爵 [ピエール・ブリュール] に接見を求めた。一時間待つように懇願された。まだ床に就いており、しかも国王に急を知らせる用事が控えているというのだ。目下の事案をすぐに終わらせてもらえるように、私の案件は一刻を争う一大事で枕元に立ちますよと脅した。これでようやくピュイジュー閣下も起き上がりガウンを羽織って、控えの間に入ってきた。最初の言葉は、貴殿の用件はよく存じておる。皇太子殿下は今朝スペインに向けて出立された、であった。さらに続けて、願いの筋は、道中手形の即刻の交付だけにしてくれ、と仰せになった。フランス語で締め括って言うには、貴殿の嘆願は時宜にかなうよ、であった。鷹揚な申し出を先にされますと、陳情ができなくなりました。しかも、閣下は国務会議でも重鎮の外務卿であり、気高くもありお約束して頂いた件は速やかに遂行されること疑いありません。手形に関しては、皇太子が尾行されず邪魔されず、騒がれず静かに旅を続けられることより他は望むべくもありません、と申し上げた。閣下が答えて言うには、皇太子殿下は通行を妨げられることはないが、旅の成り行きを見守るため跡をつけさせてもらうと。接見を賜った部屋から出るとすぐ、皇太子宛に急書を送り、可及的速やかにフランス

を出国し、道中は如何なる宗教談義もしないようお願いした。その理由として、皇太子のバリ滞在が露見したこと、フランスの外相より旅程を妨げられることはないと言質をとりつけましたが、それでも跡をつけられ疑念が生じた場合、身柄を拘束されるおそれがあると伝えた。我が皇太子はバイヨヌの関で幾ばくか検問を受けたあと（現地の地方総督が後に詳しく語ってくれたところによると、どなたが皇太子かさっぱり判らなかつたという）、マドリドまで旅を続け、その目的地に一行全員恙なく到着した。イギリスの多くの貴族や廷臣たちは、皇太子殿下にお目通りを求めて、フランスを経由してスペインに渡った。その道すがらパリの役邸に立ち寄ってくれた。そういった方々をお願いして、パリ逗留中に殿下が遁隠れるように素通りされた心残りを、スペインにいる皇太子に伝えてもらった。胸中の無念を伝え聞いた殿下から、すべて直筆でしかも自署された、いわゆる直状を後に頂戴した。それでその件で抱いた殿下の薄情さに対する恨み節をご破算にした。

フランスの王妃が嬉しそうに伝えてくれた情報から、ことの顛末は十分に承知しているが、皇太子がスペインの宮廷に到着された後に生じた騒動をここに挿入しようとは思わない。王妃の話のうち、とりわけ興味深いのは、妃殿下の妹君〔花嫁候補マリア・アナ〕が皇太子の幸福を願ったということである。また、妃殿下を通じて、スペインからローマ教皇に、教皇陛下からスペインに送られた親書の内容を窺い知ることができた。その趣旨については、妃殿下の許可を得て、いずれ皇太子に伝えたい。この縁談話が及ぼす影響に関して、実に様々な憶測が飛び交った。サヴォイア大公が言うには、皇太子の花嫁捜しは、遠い昔、遍歴の騎士が魔女の呪いを解くため世界各地を巡った戯れの修行である。というのも、大公の所信では、スペイン王〔フェリペ四世〕はいずれ女王〔で妹のマリア・アナ／アンナ〕を皇室〔神聖ローマ皇帝〕に嫁がせる意向であり、英国との縁談を斟酌するのは、ただ英国王にほかの国、特にフランスと交渉させないためであるという<sup>(69)</sup>。とはいえ、パリで得た情報によると、たしかに信頼できる筋から得たもので、あの頃スペイン王は本気であったと確信を以て言える。けれど、如何にして破談になったのか、その経緯をここでは明かさない。自伝の中で挿話として語るには、閉口当惑の機密事項である。

新たな提議が為され、さらにほかからも助言を得て、皇太子はスペインの宮廷に別れを告げた。スペインのセント・アンドルーズ〔サン・アンドレス〕で供の者と船に乗り、一六二三年十月の始め頃ポーツマスに無事到着した。その報せはすぐフランスにもたらされ、ギーズ公が訪問して言うには、スペイン人は思ったほど有能ではないらしい。それというのも、当地で祝言を挙げないばかりか、他国との縁組を阻止することを何もしなかったから。答えて言った、皇太子は秘密の計略に乗せられないよう巧妙に手を打たれました。暴力沙汰に関しても、スペイン人は敢えて手出しできないほどでしたと<sup>(70)</sup>。



フランスで改革派教会の弾圧や迫害が続く中、国王の聴罪司祭たる〔ガスパル・ド・〕セギーラン神父が、汝の敵を赦しなさい〔マタイ五：四四〕という聖句について、御前で説教をした。持論を展開する中で為になる話も多かったが、赦しの内容を明示するに当たり開陳した最後の言葉が引っかかった。つまり、敵を赦すべきだが、神の敵、例えば異端者、特に改革派は赦してはならない。フランス国王はキリスト教界で最も偉大な王として、奴らがどこにしようとも見つけ出し、抹殺すべきであると<sup>(71)</sup>。この箇所は私に向けて発せられたもので、母后殿下〔マリー・ド・メディシス〕にご相談するのがよいと思った。望む時はいつでも、取り次ぎを頼まずとも私室に伺える許可を得ていた。通常は説教壇で扱う問題に干渉する気はないのですが、陛下の心の内を司るセギーラン師が新教徒をととも酷く中傷されまして、猥下の信条が及ぼす影響はフランスの領内にとどまらず、やがてその力は海を越え英国の領土にまで至ります。猥下のお考えは極めて不合理で、いやむしろ御前様もよくご存知のはずですが、我が国の皇太子殿下とご息女のお姫様〔ルイ十三世の妹アンリエット・マリー／ヘンリエッタ・マライア〕との縁組が持ち上がった矢先であり、その様なわけで猥下に今後一切口を噤むように、畏れながらお願い申しあげる次第です。また、同様にセギーラン師や同じ考えを抱いている方々に、分別を以て信条を公言しないように、どうか諫言なさって下さいと。母后殿下は私の進言に作り笑いをして耳を傾けていたが、とんだ女狐であった。つまり、セギーラン師に讒言の中身と併せて讒訴者の名を漏らしたのだ。そのため尊師の機嫌をひどく損なうことになり、刺客として同郷のプロヴァンス出身のガエヤック氏をたて、やんわりと脅迫してきた。だれが御前様に悪口雑言したのか、その張本人をよく知っているぞ。その誹謗の内容もとうに承知だ。よく憶えておけ、草の根を分け限なく貴様を捜し、きっと立身出世を阻んでやると。ガエヤックに言伝をお願いした。フランス全土を探したって、そんな脅し文句を言う奴は、女子供と生臭坊主だけだと。

このあとすぐ、母后殿下のもとに伺い、セギーラン師について言ったことは善意からであること、尻尾を掴んだわけではありませんが小生の進言は猥下に筒抜けであり、侮辱的な言葉を投げかけられたことも伝えた。態度を一変して今度は笑みをたたえ付け加えた。セギーラン師に取り憑かれました、困ったことに黒幕は女よりも執念深いのですと。母后様はこの言葉に少しギョッとして、妾も女ですけれど、それでもそうおっしゃるのと訊かれた。口幅ったいことを言うようですが、女性としてではなく、御前様の位階に敬意を表して申し上げております、とお答えして暇乞いをした。セギーラン師が私を脅そうとして行なったことは憶えていない。もし私に世俗的な立身出世の野心があれば、奴の脅迫を忘れることはなかったと思う。だが、常に書物を愛し、多忙な政界より閑暇な生活を好み、我が名を腐すのに汲々とする輩の強大な権力は、痛くも痒くもなかった。

最初の著作『真理について — 啓示, 蓋然性, 可能性そして誤謬を弁別して』は、イギリスで書き始め、当地パリで本体を仕上げ、このころ脱稿した。お歴々の方々を訪問し交渉を重ねる公務の傍ら、寸暇を惜しんで著書の完成に努めた。筆を擱くとすぐ、ヒューゴ・グロティウスに知らせた。偉大な学者で、低地帯での投獄を逃れ、パリに来ていた。私と、当代随一の学者のひとり [ダニエル・] ティレヌス氏が喜んで迎え入れた。ふたりの先哲は、ざっと目を通し、憚りながら讃辞を惜しみなく贈ってくれた。そのあとグロティウス氏が、ぜひ出版して公表するように勧めてくれた。しかしながら、著書全体の構想はこれまで書かれた如何なるものとも極めて異なっており、真理を見出す方法について著された書物すべての権威を否定し、よって独自の方法の正当性を固持するか、もしくは著書の論旨全体の件で広く世間の非難に身を晒すか、そのどちらか一方しかないと考えた。正直に告白すると、前述の碩学ふたりが高く評価してくれたことは少なからず励みになるが、数多くの異議申し立てが待ち構えているのは必定で、しばらくの間出版を差し控えた方がよからうとも考えた。ある晴れた夏の日、部屋の中でこのように意を決し兼ね悶々としていた。南に開いた窓、蒼穹には輝く日輪、そよとの風もなかった。自著『真理について』を手に取り、跪いて祈る気持ちで伺いを立てた<sup>(72)</sup>。

汝、久遠の神よ。降り注ぐ日の光を創り、胸中に天啓を授ける者よ。遠大無窮の善なる汝よ、罪深き我に願ひ事を許し給へ。拙著『真理について』を公刊すべきか思案に暮れるなり。汝の栄光がさらに増すのであれば、雲居よりしるしを下賜されんことを懇願する。汝の嘉し給う証<sup>あかし</sup>験なければ、上梓を差し控えん。

祈願し終えるとその刹那、天上より<sup>おん とろろう</sup>音吐朗朗だが優しい声が出た。今生のものとも思えず、鼓舞・激励された。待望のしるしを得て、満願と解釈した。このような次第で出版という本懐を遂げる意を固めた。如何に奇異に思えたとしても、これは真実であり、まやかさに騙されたわけではない、と天地神明にかけて誓う。なぜかという、天来の声をはっきりと聞いただけでなく、雲ひとつない未曾有の澄み切った青天に、お告げの出所を確かに見たように思えるから。

パリで自費出版するため、ようやく原稿を印刷所に廻した。とりわけ、相応しいと思える読者諸賢にのみご笑覧いただければよかった。だが後に、イギリスでも再版を出した。ヨーロッパの名だたる学者に配って散逸したばかりか、拙著を一瞥したいという懇請がキリスト教を奉じる近隣諸国は言うに及ばず遠方の国々からも届いたからだ。拙著を手に入れるためなら、返礼として望むものは何でも差し上げると約束されたが、この書にはそれ以上のものが潤沢に含まれている<sup>(73)</sup>。

フランスとの縁談は折衝が継続して行なわれ、まとまる時機が到来して、カーライル伯 [ジェイムズ・ヘイ] とホランド伯 [ヘンリー・リッチ] が特命大使としてフランスに派遣された<sup>(74)</sup>。[ここで唐突に終わる]

#### 《注》

- (59) ハーバート卿の原文では、エスタンプ (Estampes) となっている。その地は、フランスの南西部ジェール県にあるスペインとの国境近くの町で、文脈に沿わない。一八六三年の仏訳では、パリ中心部から五〇キロほど古都エタンブ (Etampés) [Étampes] となっており改めた。
- (60) シェイクスピアの『ヘンリー五世』(四幕一場二五七-五八行) に、似た台詞がある。「王がもっていて庶民がもっていないものといえば、／儀礼のほかに、形式的儀礼のほかに、いったいなにがある？」小田島雄志訳 (白水uブックス、一九八三年) 一三六頁／*Shakespeare: Complete Works, op. cit., p. 489.*
- (61) 肉刺と訳した原語は、pulseで pulse corn の略、つまり、豆のこと。マメ、タコ (胼胝)、ウオノメ (鶏眼) など、水泡や角質化した皮膚の塊のことであろう。
- (62) プルタルコスによると、アレクサンドロス大王は、全身芳香を放ち着物にまでその香りが移ったという。プルターク「アレクサンドロスは酒豪だったか」『倫理論集』河野與一訳 (岩波書店、一九八七年) 所収、一六〇頁。モンテーニュ「匂いについて」(第一巻第五章) 『エッセー (二)』原二郎訳、全六冊 (岩波文庫、一九八六年) 所収、一九一頁参照。ハーバート卿より少し若い世代のイギリスの宗教哲学者ヘンリー・ムアアの評伝に、彼が同様に芳香を発する身体の問題が報告されているが、それは聖人性を増すための小道具である。Eugene D. Hill, *Edward, Lord Herbert of Cherbury*, Twayne's English Author Series (Boston, Massachusetts.: Twayne, 1987), p. 112.
- (63) チュイルリー庭園のオレンジ温室やオレンジの木については、山根「兄弟をめぐる二本のオレンジの樹：エドワードとジョージ・ハーバート」『英語英文学研究』(二〇〇五年三月) 第五六号所載、六九-八六頁参照。なお、ドン・キホーテが遍歴の旅の途中で投宿する旅籠の女中マリトネルが語る、ワクワクする騎士道物語の件が印象的である。「どこぞのやんごとない婦人がオレンジの樹陰で愛する騎士に抱かれていると…」セルバンテス『ドン・キホーテ (前篇)』前掲、(二) 二九三-九四頁。
- (64) 父の第三代ギーズ公初代アンリは、カトリック同盟の旗頭としてユグノー弾圧に尽力した。だが、息子の第四代ギーズ公シャルルは国王アンリ四世と和睦し、プロヴァンスの地方総督になった。
- (65) 仏国王ルイ十三世の側からすると、イギリスはプロテスタントの大義名分によりフランス国内のユグノー弾圧を強く非難するが、そのイギリスが自国内ではカトリック教徒を迫害しているのではないかと、と英国王ジェイムズやチャールズを偽善者呼ばわりしても、道理に合った見方であろう。

- (66) リュイヌ公の弟オノレ・ダルベールがイギリスに派遣されたのは、一六二一年一月のことで、彼の兄リュイヌとハーバート卿との間にもめ事が生じる前であった。これは、単なるハーバートの記憶違いか、はたまた大使が本国に呼び戻される汚名を、卿が無意識に取り繕うため事の前後を取り違えたのか、定かではない。
- (67) フランシス・ネザーソールは、ハーバート卿の実弟ジョージ・ハーバートが一六二〇年一月にケンブリッジ大学の代表弁士に就任するが、その前任者であった。また、ネザーソールは、大学代表弁士を辞任してほどなく、プファルツ選帝侯妃エリザベスの秘書になった。Walton, *op. cit.*, p. 270.
- (68) 駐英のスペイン大使ゴンドマルは、カトリック復権の命を受けイギリス国内のイエズス会士とともに政治・宗教活動に奔走した。劇作家トマス・ミドルトンは、彼らの暗躍する様を『チェス・ゲーム』（一六二四年初演）でパロディとした。覇権の復権を目論むスペインの怒りを買いかねないこの風刺劇をロンドンの舞台上で上演を許可したのが、なんとハーバート卿の実弟ヘンリー・ハーバート、当時の宮廷饗宴局長であった。Thomas Middleton, *A Game at Chess*, ed. T.H. Howard-Hills (Manchester: Manchester UP, 1993). 山根正弘「モグラのイメージ：十七世紀イギリスを映す鏡」英米文化学会編『英文学にみる動物の象徴』（彩流社、二〇〇九年）所収、六七-六八頁参照。
- (69) イギリスの皇太子チャールズ・スチュアート（後のチャールズ一世）の第一花嫁候補となったマリア・アナ（アンナ）は、スペイン王フェリペ三世の二女。皇太子チャールズとの縁組がご破算になったあと、神聖ローマ皇帝フェルディナント三世に嫁ぎ、皇妃となる。マリア・アナの姉はフランス王ルイ十三世の妃アンヌ・ドートリッシュ。長兄はスペイン王フェリペ四世。フェリペ四世は、上述マリア・アナとフェルディナント三世との間にできた娘の姪と結婚。
- (70) 一六二三年二月十八日、チャールズ皇太子は上述マリア・アナ（アンナ）との縁組を整えるべくバッキンガム侯他三名を伴い、変装してパリ経由でスペインへ旅に出かける。三月七日にマドリッドに到着。皇太子一行は、フェリペ四世の重臣オリバーレス伯公爵ガスパール・デ・グスマンに手玉に取られる。イギリスにとっては屈辱的な婚姻条約を強要され、同年八月三十日、マドリッドを発つ。十月五日に皇女の花嫁を連れずに、イギリス本土に戻る。このお忍び道中記については、本自伝にも何度か登場するヘンリー・ウォットンによる当時のパンフレットを参照。Henry Wotton, *A Short View of the Life and Death of George Villiers, Duke of Buckingham*, Perfect Library, (1624; rpt. n.p.: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2015), esp. pp. 7-12.
- (71) ハーバート卿が若いころ、騎士の素養を身に付ける上でお世話になった、いわゆるフランスにおける庇護者のアンリ・モンモランシー公爵（父はアンヌ・モンモランシーでフランソワ一世などに仕えた元帥）は、先仏王アンリ四世の軍事面での側近であった。南フランス、特にラングドック地方の宗教戦争鎮圧に功をなし、元帥の称号を授与される。カトリックの穏健派ながら、極右カトリックに加担せず、かといって極左ユグノー最前でもなく、強いフランス建国のため一丸となる理想を掲げるポリティーク派であった。両者の国内での共存を認めるその一派の考え方が、やがて一五九八年にナントの勅命へと結実する。だが、ハーバー

トのフランス大使在任中、一六二一年、リュイヌ公の進言を受けルイ十三世の国王軍は、ナントの勅命を無視して再びユグノー弾圧を開始した。ハーバートが、キリスト教徒のキリスト教徒によるキリスト教徒に対する弾圧や迫害が現実に行われている状況を目の当たりにして、その宗教戦争の根拠や正当性を疑い、深く考えるようになったとしても不思議ではない。一六八五年、次の仏王ルイ十四世がナントの勅令を廃止し、ユグノーを徹底的に弾圧する政策に転じたことが、ジョン・ロックをして『寛容についての手紙』を書かせる契機となったとしたら、ルイ十三世がナントの勅令を有名無実にする政策に踏み切ったことが、ハーバートをして『真理について』を書かせるきっかけとなったのであろう。神の本性或信仰の本質は同じであるのに、儀式や制度の違うという理由でキリスト教の同胞の命を奪う権利は、何に由来するのか。“Wars of Christians against Christians: Herbert of Cherbury’s Theological Antidote to Religious Warfare,” in Roger A. Johnson, *Peacemaking and Religious Violence: from Thomas Aquinas to Thomas Jefferson* (Eugene, OR: Pickwick, 2009), pp. 159-96. ジョン・ロック『寛容についての手紙』加藤節ほか訳(岩波文庫, 二〇一八年)所収の訳注一八五番参照。序でながら、平和主義者のエラスムスは、反戦の立場からキリスト教徒が相食む愚を説いた。どうしても人間の性として戦争を止められないのであれば、異教徒のトルコ人に遠征軍を送るように指南する。箕輪三郎訳『平和の訴え』(岩波文庫, 二〇〇〇年), 七六頁; 沓掛良彦・高田康成訳『エラスムス=トマス・モア 往復書簡』(岩波文庫, 二〇一五年), 三八六-八七頁参照。

- (72) ハーバート卿の至高の力・神に対する承認要求と啓示は、二十世紀に活躍したケンブリッジ大学の文学史家バジル・ウイレー(ウィリー)によって取り上げられ論じられる。その『自叙伝』の掉尾を飾る有名な箇所が大浦幸男によって邦訳されている。Basil Willey, *The Seventeenth Century Background* (1934; rpt. New York: Columbia UP, 1967; 1977), pp. 127-29 / B・ウイレー『十七世紀の思想的風土』深瀬基寛, 他訳(創文社, 一九七九年), 一五五-五七頁。
- (73) ハーバート卿の処女作『真理について』(ラテン語版)は、一六二四年パリで出版。パリの第二版は、一六三六年。フランス語訳(通説によると、神学者マラン・メルセンヌ訳)は、一六三九年パリで出版。ラテン語のロンドン版は、著者の存命中では、一六三三年に出版されている。現代英語訳は、メイリック(メリク)・カレ訳, パリの第二版からほぼ三百年後の一九三七年。Edward Herbert, *De Veritate*, trans. Meyrick H. Carre (1937; rpt. London: Thoemms, 1992).
- (74) ハーバート卿に対するフランス大使罷免の通知は、一六二四年四月十四日付。実際に本国に戻ってきたのは、同年の六月二十四日。カーライル伯ジェイムズ・ヘイト(後のホランド伯)ケンジントン卿ヘンリー・リッチがフランスとの縁談交渉を進めるためパリ入りしたのは、同年五月。皇太子の縁組に対する二度にわたるイギリス王室との意見の相違、先はスペインの皇女、この度はフランスの王女との縁談の危険性をめぐる対立が、判官鼻風のハーバート卿に突然の解任を招いたらしい。C.H. Herford (ed.), *Introduction to The Autobiography of Edward, Lord Herbert of Cherbury* (Newton, Montgomery: Gregynog Press, 1928), pp. xi-xii.